

I 全体研究主題

基礎的・基本的な内容の習熟・定着を図り，学力向上をめざす方策の研究
～思考力(社会科)，計算力(算数・数学科)の向上と言語力(国語科)の充実をめざして～

II 全体研究主題設定の理由

延岡市の教育の基本方針は、「のべおかの未来をひらく人づくり」である。小・中学校では、義務教育9年間をとおして、将来の延岡市を担う子どもたち一人一人に、延岡市民として生きていく力を育てることが大きな役目である。そのために、延岡市教育委員会では、「21世紀を生きる人づくりのために」という具体的な指針を示し、「基礎的・基本的な学習の定着を図り、自ら学び自ら考える力をはぐくむ教育」の推進に努めているところである。平成15年度から「学力支援事業」として延岡市学校教育研修所による実践研究もその推進力の一翼を担ってきている。

また、各小・中学校においても、学習指導要領改訂に伴い新しい内容にかかわる単元開発や教材準備を計画的に進めている。

このようななか、全国学力・学習状況調査等の結果から、子どもが問題意識をもち、既習の知識に基づいて考える力(思考力)、数量に関する基礎的・基本的な知識や技能(計算力)、基礎的・基本的な言葉の力(言語力)をどのように育てていけばよいか、今日の延岡市の教育的課題としてとらえられた。そこで、思考力については「社会科」、計算力については「算数・数学科」、言語力については「国語科」を軸に、各教科の特性を生かしながら研究を推進していきたいと考え、本主題を設定した。

なお、「社会科」では、新教育課程の全面実施に伴った「小学校3・4年生の社会科副読本」の改訂をとおして研究を進めた。「算数・数学科」では、「計算力実態調査」と「パワーアッププリント」をとおして、計算力を定着させる方策を追究した。国語科では、「言語力」をキーワードに「音読文集」「パワーアッププリント」の作成など、義務教育9年間を見据え、研究を進めた。

今後、本研修所の研究が、延岡市の小・中学校で学ぶ子どもたちに、「たくましいからだ」「豊かな心」「すぐれた知性」をそなえ、子どもたちが郷土「のべおか」への愛情と誇りをもってくれたら幸いである。

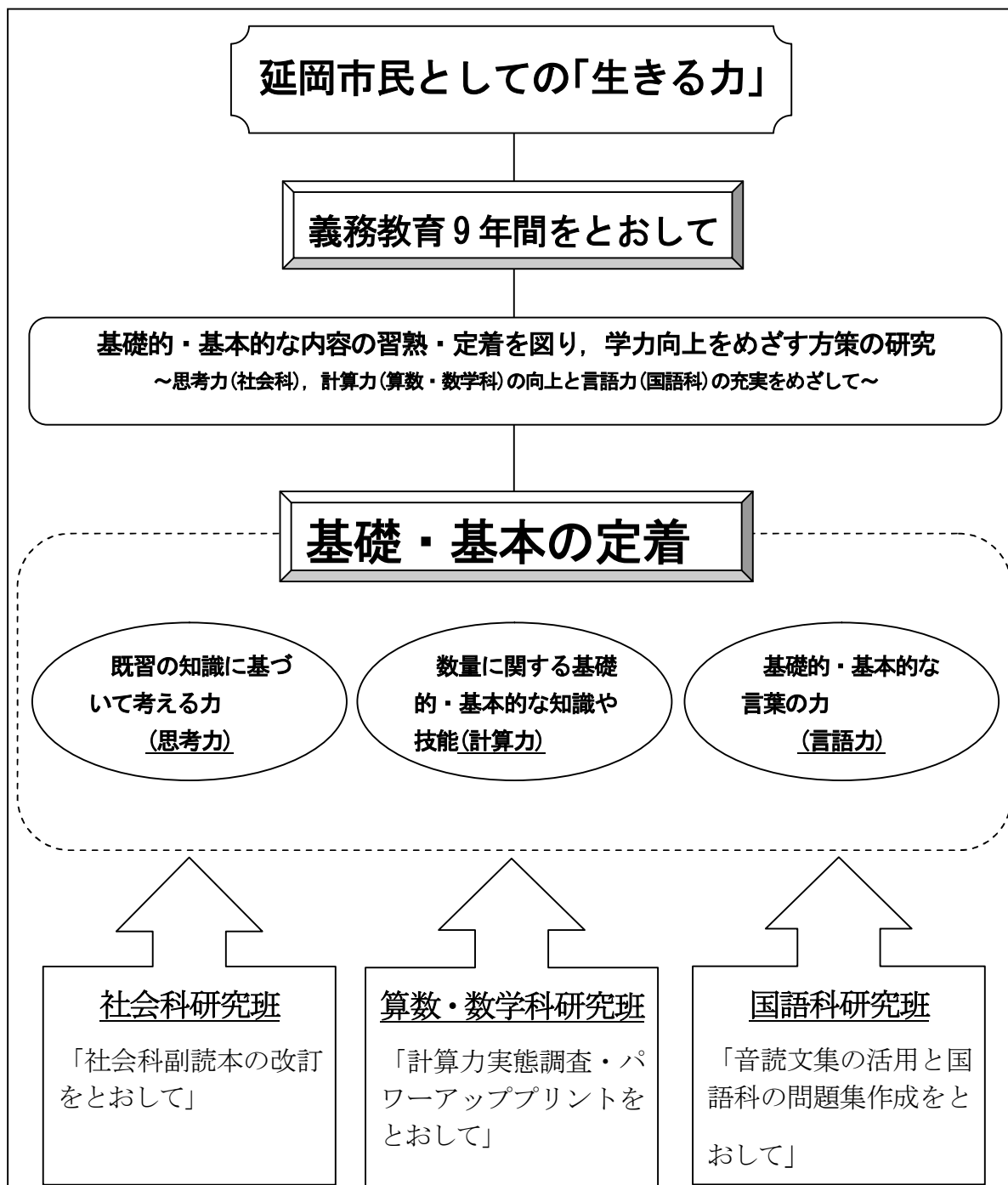
III 全体研究目標

延岡市の小・中学校の学力向上を図るために、子どもの実態を分析しながら、子ども一人一人が学習意欲をもち、基礎的・基本的な力や主体的に考える力を身につける学習指導の在り方を実践的に究明する。

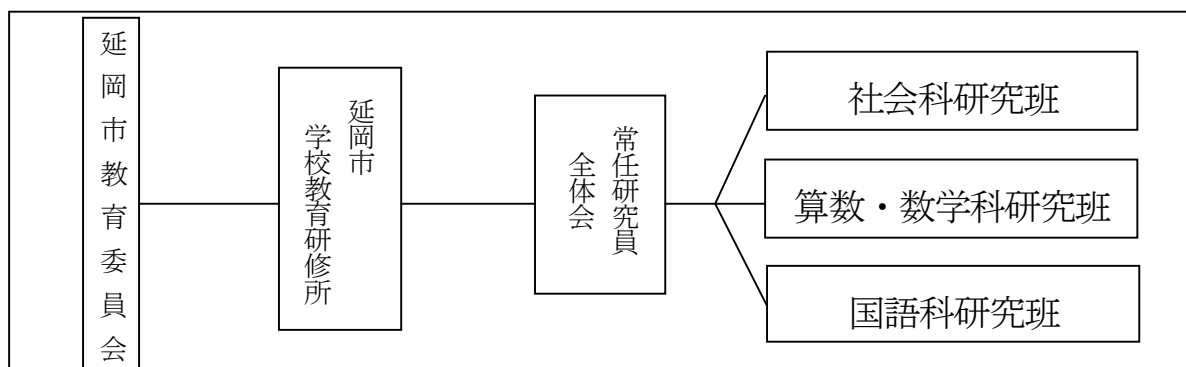
IV 全体研究仮説

子どもの実態に応じて社会科副読本や算数・数学科、国語科の問題集、音読文集を作成・活用することで、学習意欲が高まり、自ら考える子どもが育つとともに、基礎的・基本的な力が定着し、延岡市全体の学力向上につながるであろう。

V 全体研究構想図



VI 全体研究組織



Ⅶ 各班の研究内容

1 社会科研究班「副読本の改訂をととして」

(1) 研究目標

新学習指導要領の趣旨，延岡市の子どもの実態，授業の質の向上をふまえ，小学校中学年で使用する社会科副読本「わたしたちの郷土延岡市・宮崎県」を大幅改訂するための基礎的な研究及び改訂作業を行い，社会科に関する学習意欲の高まりと学力向上をめざす。

(2) 研究仮説

習得・活用・探究の問題解決型の構成が明確で，授業の流れが見える副読本を作成すれば，指導者にとって活用しやすい資料となり，授業力の向上につながるであろう。また，子どもにとっても興味・関心が高まり，見通しをもって学習を進めることができ，学力向上につながるであろう。

(3) 研究の内容と実際

ア 学習指導要領改訂のポイント

今回の学習指導要領改訂に伴い，社会科におけるポイントについて話し合いを行った。そこで，全般として「生きる力の一層の重視」という考え方のもと，「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う」「思考力・判断力・表現力の育成の重視」「よりよい社会の形成への参画に関わる学習内容の充実」「作業的・体験的な学習や問題解決的な学習の一層の充実」「学習や生活の基盤となる知識・技能の習得」の5つの視点を重視することとした。また，単元ごとには，以下のような点に留意することにした。

(第1単元 身近な地域)
・調べたことや考えたことを表現する力 ・地域の特徴をとらえる視点 ・場所と様子の比較
(第2単元 生産や販売)
・生産や販売と自分たちの生活とのかかわり ・生産や販売にかかわる人々の工夫 ・生産や販売の仕事と地域とのかかわり
(第3単元 地域の安全)
・地域の災害や事故 ・人々の工夫や努力 ・地域の住民の願い
(第4単元 生活環境)
・水，電気，ガスから選択 ・ごみ，下水から選択 ・事実に基づいた追究
(第5単元 生活の移り変わり)
・地域の生活の向上 ・地域への誇りと愛情 ・具体的，体験的な学習活動

イ 社会科副読本編集における基本的な考え方

(ア) 地域副読本の意義と役割

地域学習とは，自分の住んでいる地域社会について主体的な活動を行うことをととして，社会科の学び方や調べ方の基礎・基本を育てる学習である。そのため，地域の実態に即し，地域教材について，資料集・事例集・学習ノート・学習の手引きを備えた「地域教科書」としての副読本が必要であると考えた。また，児童にとっては地域社会を理解するための教材であることや，主体的な学習を可能にし生涯学習の基礎・基本となる学び方などを身につけるための教材であることが大切である。更に，教師にとっては指導計画の作成がしやすくなり，「つかむ，見通す，調べる，まとめる」という学習過程の流れが把握でき，学習指導を行う際の手がかりになると考えた。

(イ) 新しい副読本のスタイル

「旧副読本」について，実際に指導している3・4年生担当教諭に活用する際の問題点等

の調査を行い、新しい副読本における段階ごとの内容や体裁について検討を行った。その結果、(ア)で述べた内容に加え、誰もが活用しやすいユニバーサルデザインの視点も重視し、学習過程を子どもの思考の流れに沿った形式にしたり、まとめのヒントを提示したりするなど、主体的な学習を進めるための手立ても取り入れるようにした。

つかむ段階

- 興味を高める写真
- 気付きを誘発する吹き出し 😊
- 問題意識を生み出す資料
- 単元を貫き通す学習問題の提示

見通す段階

- 学習の流れのわかる学習計画表 ※4年生は「調べること」を書き込み式にし、主体的な学習の手立てとする。 😊
- 素材の例示
- 調べ方などの方法の例示 😊

調べる段階

- 本時のめあて ※4年生は書き込み式にし、主体的な学習の手立てとする。 😊
- 気付きを誘発する吹き出し 😊
- 知識習得のためのスペース
- まとめのヒント ※穴埋め式にまとめることで、児童の主体的な活動を促す手立てとする。 😊

まとめる段階

- 単元のまとめにつながる資料の提示
- まとめ方の例示 😊
- 単元のまとめのヒント ※3年生は穴埋め式、4年生はキーワードから選ぶ形式にする。 😊

ユニバーサルデザイン

(段階ごとのスタイルとポイント)

ウ 社会科副読本を活用した検証授業をとおして

延岡市立延岡小学校の協力を得て、研究員による社会科副読本を活用した検証授業を実施した。単元は第3学年『市の人びとの仕事とわたしたちの暮らし「農家の仕事」』である。

つかむ・見通す段階では、本時学習内容の焦点化を図ることが大切である。そこで、教師と児童が社会科副読本で学習計画表を確認した。このことにより本時の問題や学習の流れについて見通しをもって取り組む姿が見られた。また、問題に対する予想(自分の考え)を明確にして、調べる段階に臨むことができた。

調べる段階では、社会科副読本の玉ねぎ作りの各作業写真を見比べた。このページでは手順を表す矢印を書き込み式にしたことで、どんな作業をしているのか、どのような手順なのかを考える姿が見られた。また、周りの友達と話し合いながら思考を深める姿も見られた。

まとめる段階では、副読本のまとめのヒントを確認しながら、主体的にまとめの言葉を考える児童の姿が見られた。また、児童同士の言葉かけの中に「まとめのヒントを見れば分かりやすい。」などの声も聞かれ、習得した知識や技能を活用する場面も見られた。

実際に授業を行った教諭からは、単元の流れが分かりやすく見通しをもって指導ができたことや、副読本の中にある吹き出しを意識させることで、個に応じた支援もしやすかったなどの感想が得られた。そして、何よりも一時間とおして、作業的な活動や学び合いの時間が十分に確保され、児童の関心・意欲が高まっている姿を見ることができた。



(見通す段階：学習計画表を確認する場面)



(調べる段階：児童が作業をする姿)



(まとめる段階：児童の主体的な姿)

エ 教師用手引きの作成

社会科副読本作成に伴い、副読本の特徴や活用方法が記された手引きが必要であると考え、「教師用手引き」を作成することにした。これには、副読本活用例や社会科で身に付けさせたい力の系統図、単元ごとの学習計画や毎時間の問題に対するまとめの例などを載せることにした。また、事前に行った調査から、実際に指導する際にあると便利な教材として、「指導案例」「地図記号」「延岡市の年表」「延岡市の白地図」「郷土に伝わる伝統芸能例」なども資料として加えることにした。現場の声を反映した資料であるため意義のある資料であると考えた。

単元名 「くらしを支える水」 (全12時間)					
段階	中心概念	本単元の学習目標	調べること	学習内容	学習券
つかむ			● 水の由来 ● 水の使われ方	● 水の使われ方	2
見通す			● わたしたちは、水をどれくらい使っているのだろうか。 ● じゃまの水道どこからくるのだろうか。	● 水の使われ方 ● グラフの読み取り ● インタビュウの仕方	7
調べる	飲料水の確保は、計画的・地方的にも、地域の人口と健康な生活維持と向上に役立っている。	● わたしたちは、いつもきれいな水を使っていると信じているのだろうか。 ● 水を貯めるために、わたしたちができることは何だろうか。	● どのようにして水をきれいしているのだろうか。 ● 水を貯めるために、わたしたちができることは何だろうか。	● きれいな水にする仕組み ● 排水、森林を守る、プールやセラー	10
まとめる			● なぜ、わたしたちはいつもきれいな水を使うことができるのだろうか。まとめてみましょう。	● 排水、森林を守る、プールやセラー	11

(教師用手引きの例)

2 算数・数学科研究班「算数・数学科の問題集作成をとおして」

(1) 研究目標

計算力実態調査とパワーアッププリントをとおして、算数・数学科に関する学習意欲の高まりと計算力の定着をめざす。

(2) 研究仮説

計算力実態調査を基にした、まとめプリントや復習プリントに取り組みせ、記録カードに取組を記入させたり、賞状を贈ることで賞賛したりすれば、学習意欲が高まり、計算力の定着へとつながるだろう。(仮説1)

延岡市の実態に合ったパワーアッププリントを作成し、取り組みせれば、計算力の定着へとつながるだろう。(仮説2)

(3) 実践内容（昨年度からの継続研究）

ア 研究の実際

(ア) 昨年度の研究内容の確認

- 計算力実態調査を2回行うことで、計算力の変容を示すことができた。
- 分析表を作成することで、児童生徒の苦手な学習内容を示すことができた。

(イ) 本年度の研究内容の検討

昨年度の研究内容を受け、次の6点に取り組んだ。特に3つを重点的実践事項として取り組んだ。

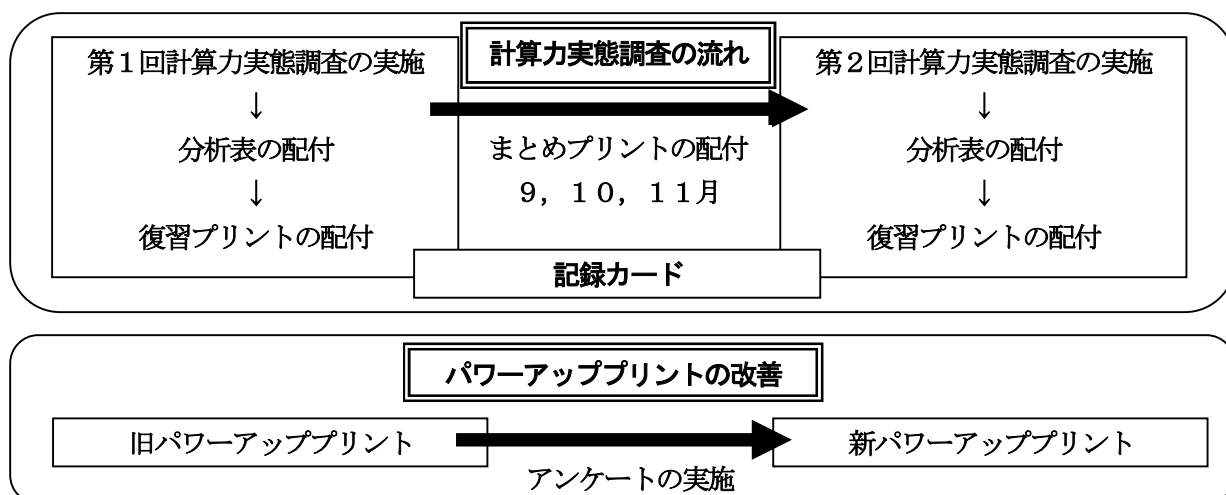
◎ 1学期（7月）と2学期（12月）の計算力実態調査の実施

- 計算力実態調査の分析表の作成

◎ 計算力実態調査の復習プリントの作成

- 「記録カード」の作成
- 「まとめプリント」の作成

◎ 新パワーアッププリントの作成



イ 研究実践

(ア) 1学期（7月）と2学期（12月）の計算力実態調査の実施

a 目的

- 児童生徒の計算力の定着を図り、日常の算数・数科学習の活性化を図る。
- 1回目と2回目の調査結果から、計算力の向上が見られたかを検証する。

- 児童生徒の努力に対して賞状を贈ることで、算数・数学科への意欲を向上させる。

b 集計結果

学 年	【第1回（7月実施）】			【第2回目（12月実施）】		
	実施人数	平均点	満点者数	実施人数	平均点	満点者数
小学校1年生	1,192	93.9	679	1,193	94.6	620
小学校2年生	1,209	92.5	577	1,220	93.5	513
小学校3年生	1,292	89.3	409	1,281	92.0	578
小学校4年生	1,286	87.3	515	1,266	84.4	357
小学校5年生	1,241	82.9	305	1,229	88.0	376
小学校6年生	1,314	89.5	449	1,309	89.1	595
中学校1年生	1,268	79.9	99	1,247	73.0	138
中学校2年生	1,234	68.6	90	1,242	77.5	177
中学校3年生	1,251	75.7	142	1,227	68.7	126
合 計	11,287	82	3,265	11,214	81.7	3,480

c 賞状

- 第1回目の満点者には、A4で作成した満点賞を各校で印刷・活用してもらった。第2回目の満点者を調べ、常任研究会から賞状を贈った。

d 考察

- 難易度を揃えることが難しく、比較しにくいですが、特に中学校2年生は、平均点が8.9ポイント向上し、満点者数が87名増えた。
- 1学期末と2学期末に実施することで、学期末のまとめとして行うことができた。
- 賞状を贈ることで意欲の向上につながった。

(イ) 計算力実態調査の分析表の作成

a 目的

- 計算力実態調査から児童生徒のつまづきを示し、授業実践に生かす。

b 考察

- 児童生徒のつまづき箇所を以後の指導に役立てられた。

(ウ) 計算力実態調査の復習プリントの作成

a 目的

- 計算力実態調査で見られた児童生徒の苦手な学習内容を補う。

b 考察

- 分析表を基に作成した復習プリントに取り組むことで、児童生徒の苦手な学習内容を補うことができた。

(エ) 「記録カード」の作成

a 目的

- 児童生徒が計算力実態調査とまとめプリントの結果をまとめることで、1年間の取組の記録にする。
- 現段階における未定着の内容を確認し、基礎・基本の定着を図る。

b 考察

- 成績の変容が分かりやすく、児童生徒の意欲付けにつながった。
- 苦手な内容を把握することで、指導に生かすことができた。

(オ) 「まとめプリント」の作成

a 目的

- 普段の学習内容の定着を図る。
- 第2回計算力実態調査へ向けた計画的な取組が行えるようにする。

b 考察

- 一ヶ月ごとに実施することで、月ごとの習熟度を把握することができた。

(カ) 新パワーアッププリントの作成

a 目的

- 改訂される教科書や延岡市の児童生徒の実態に合った問題を作成する。

3 国語科研究班「音読文集の活用と国語科の問題集作成をとおして」

(1) 研究目標

音読文集について継続研究をするとともに、「言葉の特徴やきまり」といった国語の特質に関する事項の定着を図るための「ぐんぐんプリント（国語版パワーアッププリント）」を作成し、個に応じた基礎的・基本的な言葉の力(言語力)の定着をめざす。

(2) 研究仮説

音読文集の活用について継続研究を行い、「言葉の特徴やきまり」といった国語の特質に関する事項の定着を図るための「ぐんぐんプリント（国語版パワーアッププリント）」の作成を行い活用していけば、個に応じた基礎的・基本的な「言葉の力」の定着が図れるであろう。

(3) 実践内容

ア 音読文集について（資料1）

(ア) 音読文集についての実態調査

平成16年度に本市常任研究員が音読文集を作成した。その後、様々な取り組みを経て、平成19年度からは、小学校1年生の全児童を対象に、配付されるようになった。現在では4年生までが全員持っていることになるが、その活用については、各先生方にまかせているのが現状である。3年前から音読に関する発表会等を開催し、幅広く活用してもらおうと活動を行ってきているところである。ただ、延岡市の児童・生徒全員が活用する取組になっているかという課題も残る取組であった。

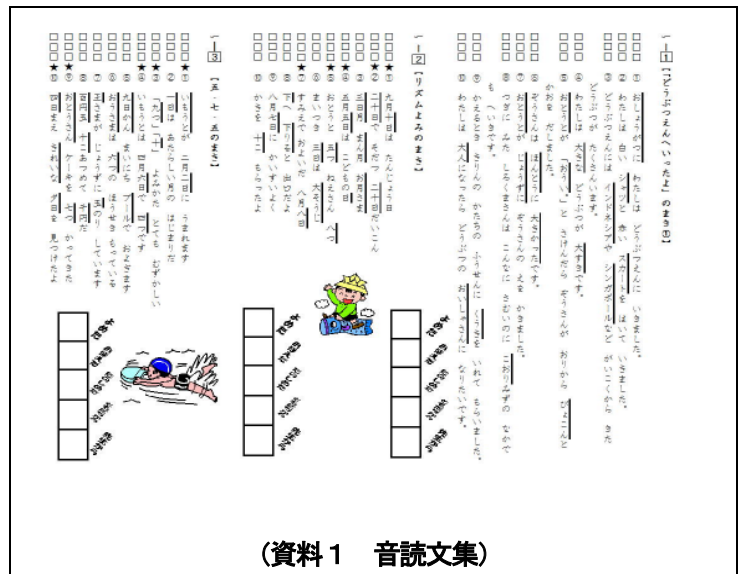
そこで、本市の実態に即して作成された「音読文集」をよりよく活用していくために、先生方にアンケートを実施することにした。このアンケートを元に、音読文集の活用についての実態を明らかにするとともに、今後の活用の在り方についての参考にすることにした。

アンケートの結果からは、9割以上の先生方が音読文集について知っていると答えていたが、学習指導に使用したのは2割と、活用があまりなされていない実態が浮き彫りとなった。

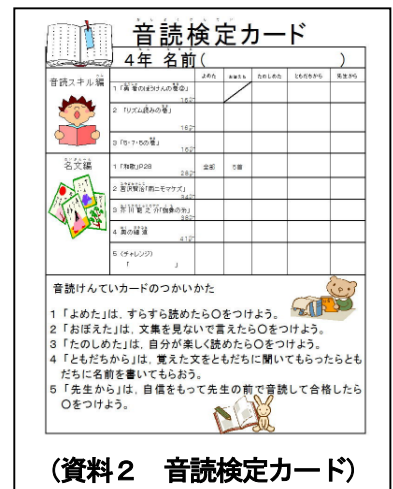
先生方の声をまとめてみると、「時間的なゆとりのなさ」や「別の音読文集の利用」といった声が挙がる一方「どの学年で使用したらよいか目安の学年があるとよい」「活用の仕方の周知をお願いしたい」といった音読文集そのものの取り扱い方について先生方が戸惑われている現状が明らかになった。

(イ) 音読認定制度

実態調査の結果を踏まえて本年度は、まず「活用する目安の学年」の整備を行った。整備を行う際には、来年度採用される教科書の内容を考慮しながら、古文や漢文など、その学年では



(資料1 音読文集)



(資料2 音読検定カード)

少々難解であるものも入れるようにした。

次に、本市児童生徒が全員使える「音読検定カード」（資料2）の作成を行った。難解であるものも含め、美しい響きのある日本語に慣れ親しむことを考え、「ただ読める」ことだけでなく「暗唱できる」ことを最終目的とした。また、友達との交流を大切にするために、「友達から」の欄を設定し、互いに聞き合う手立てをとるようにした。この検定カードでは、一定基準を満たした児童生徒全員に認定証を配付することになっている。

イ ぐんぐんプリント

(ア) ぐんぐんプリントの作成（資料3）

本市における国語科の学力の実態は、宮崎県の平均を下回り、特に「言語についての知識・理解・技能」に関する落ち込みが非常に大きい。読みとりや文章を書く中で必要になってくる力を伸ばす必要があると考え問題集の作成を行うことにした。特に「言語に関する力の育成」については、教科書に配当されている「言語に関する単元」及び「言葉の広場」の時間の指導の大切さが挙げられる。ただ、指導後の定着を図るためのプリント類に限られ、習熟をさせるのがなかなか難しいことが定着率の悪さにつながっているのではないかと考えた。

作成にあたっては、どのような指導内容であるのか明確にした上で、10分から15分の短時間でできるものということ考慮に入れていった。また、先生方が採点しやすく児童生徒も自己採点しやすいように模範解答も付けることにした。

国語ぐんぐんプリント四年①
漢字辞典の使い方を知ろう
名前() 点

□ ()に正しい漢字の口の中からえらんで書きましよう

① 漢字辞典についてまどめてあります。
多くの漢字辞典は、()に漢字を集め、部首の画数の()ものから順にならべてあります。また、部首が同じ漢字は、画数の()ものから順にならべてあります。

だから、漢字辞典を使う時は、まず、調べたい漢字の()が何であるかを考えます。

② 漢字辞典を使って「材」という漢字を調べます。
ア「材」は、部首が()の漢字です。
イ 部首さくいんを見ても、()の部首の中から見付けて「ジ」を開きます。
ウ 同じ部首の漢字は、画数の()ものから順にならべてあります。
(※同じ部首を何回か調べてもよいです。)

□ 次の漢字の部首は何でした。(5点×4)

例 給 (糸) (いん)

① 順 () (いん)

② 達 () (いん)

これらでできるかな? 辞 () (いん)

10点×5
教.ED P18~19

(資料3 ぐんぐんプリント)

四 三 さい オ 木 きん 画数 少ない 多い 部首

(イ) 活用の効果について

活用にあたって、2学期にまず常任研究員の所属する学校で試験的に活用を試みた。

活用時間については、指導単元の授業時間という声が多く寄せられたが、前学年のプリントを配付した学年では、復習に「宿題」として出したり、

「朝の時間」で活用したりした。とくに高学年を受け持たれている先生方からは、「これまでの復習として活用することができた」「個に応じた指導に使えた」と好意的な意見が多く寄せられた。

活用における効果については、1学期のワークテストと2学期のワークテストの平均点数で比べてみることにした。(資料4) この結果から、児童に学習内容が定着してきていることが分かる。特に、学期末のまとめのテストの結果から、学習内容の定着のために繰り返し活用して頂いたことが定着へとつながったのではないかと考えられる。

(ウ) 今後について

3学期に市内の各小・中学校に1年分の問題を配付し、活用をしてもらっている最中である。活用についてのアンケートを同時に行い、その声を踏まえて修正したものを「ぐんぐんプリント集」として、次年度全児童生徒を対象に配付し活用してもらうことにしている。教科書が改訂され、指導内容が少し変わっているが、それに対応したものにして配付を行う。また、先生方が活用しやすいように

	1学期	2学期
各単元の言語に関する領域テスト	40.5 (50点満点中)	43.8
「学期末まとめ」テスト	36.0 (50点満点中)	41.5
「言葉の力」テスト	74.8 (100点満点中)	84.0

(資料4 ワークテストの平均点の比較)

各学校1部ずつファイルに納めた形で配付する予定である。

VIII 成果(○)と課題(●)

1 社会科研究班「社会科副読本の改訂をととして」

- 児童の思考に沿った問題解決的な学習が展開できる副読本を作成することができた。
- 各単元の目標や指導事項など教師用の手引きを活用しながら、授業実践しやすい副読本を作成することができた。
- 次年度以降は、副読本に関するアンケートを実施し、円滑な学習指導に必要な内容の追加・修正を行う。

2 算数・数学科研究班「計算力実態調査・パワーアッププリントをととして」

- 計算力実態調査を学期末に実施することで、定着度を把握することができ、苦手な単元の指導に生かすことができた。
- 計算力調査とまとめプリントの結果を児童生徒自らが記録カードに記入することで、数学・算数に対する意欲の向上を図ることができた。
- アンケートを基に、現場のニーズに合った計算力実態調査の問題の作成や実施時間等を改善していく必要がある。
- パワーアッププリントについての認知度を上げて、さらなる活用を図るための方法を考えていく必要がある。

3 国語科研究班「音読文集の活用とぐんぐんプリント(国語科の問題集)作成をととして」

- 音読文集の使用学年の目安や検定カードの作成をととして、音読文集がより使いやすいものになった。
- 本市の子どもの実態に即した「ぐんぐんプリント」の確実な活用を通して、言葉の力の定着に繋がることが分かった。
- 独自に「音読文集」を購入している学校もあり、本市一丸の取組となる手立てが必要である。
- ぐんぐんプリントについての認知度を上げていくための周知の方法を考えていく必要がある。

引用・参考文献

小学校学習指導要領解説	社会・算数・国語編	(平成20年8月)	文部科学省
中学校学習指導要領解説	社会・数学・国語編	(平成20年9月)	文部科学省
社会科副読本 わたしたちの郷土	延岡市 宮崎県	(平成22年3月改訂版)	延岡市教育委員会
小学校社会第3・4学年用	新訂 副読本作成の手引き	(平成21年10月)	東京書籍
わくわく 算数	教科書(小1~6)	(平成22年度用)	啓林館
未来へひろがる 数学	教科書(中1~3)	(平成22年度用)	啓林館
平成22年度全国学力・学習状況調査【小・中学校】	報告書	(平成22年10月)	文部科学省・国立教育政策研究所

研究同人

延岡市教育委員会 学校教育課

所長(学校教育課長) 宮田 靖 指導主事 柳瀬 智文

社会科副読本編集員

学校支援アドバイザー 伊東 忠俊 校長 酒井 康行(上南方小学校) 教頭 南正覚 雅士(東海小学校)

研究員(教諭)

【社会科研究班】	秋月 朋美(川島小学校)	榎本 晴彦(岡富小学校)	興梠 大輔(伊形小学校)
	高森 亮(南中学校)	津田 淳志(東小学校)	二宮 優子(西小学校)
	星原 直美(延岡小学校)		
【算数・数学科研究班】	飯干 尚(緑ヶ丘小学校)	田川 裕子(南方小学校)	寺原 敬美(旭小学校)
	錦織 謙一(東海小学校)	日高 佑美(岡富中学校)	
【国語科研究班】	薄井由貴恵(西階中学校)	長田 俊彦(南小学校)	甲斐 尚和(恒富小学校)
	金澤由紀子(土々呂中学校)	長友 強(港小学校)	永倉 泰治(一ヶ岡小学校)

